

第561回 長野放送番組審議会

1. 開催年月日 令和7年7月2日（水）午前11：00より

2. 開催場所 長野放送本社会議室

3. 委員の出席 ○委員総数 8名

○出席委員数 6名

○出席委員の氏名（敬称略・委員は五十音順）

林 新一郎 委員長

井上 裕子 副委員長

新芝 正秀 委員

笹本 正治 委員

中谷 富美子 委員

中山 潔 委員

○欠席委員の氏名（敬称略・委員は五十音順）

樋代 章平 委員

南澤 光弥 委員

○放送事業者側出席者名

須垣 有司 （代表取締役社長）

早川 英治 （取締役 報道制作・デジタル推進担当）

小林 修 （取締役 編成業務・放送番組審議会担当）

浅輪 清 （編成業務局長

兼 考査部長 兼 放送番組審議会事務局長）

北澤 輝久 （編成業務局編成部長 兼 視聴者室長）

伊藤 晴彦 （報道制作局長）

宮本 利之 （報道制作局次長）

東澤 鈴美 （長野放送管財ディレクター）

4. 議題

（1）番組審議

『 NBSフォーカス∞信州

太一の光 ～全盲ストライカーの見つめる世界～ 』

(令和7年5月30日(金)午後7時00分～7時57分 放送)

(2) 視聴者対応報告(令和7年6月分)

(3) その他

5. 議事概要

(1) 番組審議

- ・10年にわたって1人の障害を持った人物を追いかけて取材されていたということに非常に敬意を表したい。とても価値のあることだと思った。
- ・番組の作り方で、成長と共に変わっていく容姿や言葉遣いで、時間の経過がよく表されているなと思った。
- ・ご家族自体が皆さん明るくて、家族の映像も非常に良かった。こういう家庭だからこそ、そういう成長をしていったのだろう。
- ・盲学校でのルームメイトやブラインドサッカーを教えてくださいました先生との出会いというのが、運を引き寄せたのではないかというところも、うまく描けた。
- ・「どんな人でも対等に暮らせる世界を目指したい」と小学生が考えるのはすごい。ただそれを質問の中から引き出したというインタビューは良かった。
- ・ブラインドサッカーを通じて障害者でありながら健常者と共に共生できることを感じて、生き生きと生活をしている太一さんの様子というのが、すごく手に取るように分かった。
- ・目に見えないことに対する偏見に悩みながらも、目が見えないことを理解してもらうことで共生することができるという気づきというのがすごく印象的だった。
- ・代表監督の言葉で、「障害者だからこうしたいと求めて意見をしていくことが共生社会に繋がる」。要するに「障害者の立場で待っていてはダメで、障害者の立場で主張することが非常に重要だった」という言葉が、非常に番組の重要な主張だった。

- ・日常の様子から太一さんがとても表情豊かで、感情の変化がその表情でよく分かり、しっかり映像として捉えられていた。
- ・太一さんの高校合格の瞬間とか、パラリンピックの出場の瞬間とか、代表と勉強の両立に悩む瞬間などは、非常に等身大の高校生という風なことがあり、そういった生々しい瞬間を映像として残したことに、ドキュメンタリーとしての価値があった。
- ・「普通高校に行くことが良いことではなくて、普通高校に行く選択肢もあることを証明したい」と言った発言がすごく印象的で、この番組のキーワードである共生という言葉がある意味明確に示していた。
- ・最後の言葉で、「見えるようになりたいか」と聞かれるが、「見えたらまた良いことがあったかもしれないが、こういう人生を送ってきたので、こういう人生を大事にしたい。その全てが光なのです。」に感動した。
- ・最後の太一君の発言の中で、「共生社会に向けて挑戦する時のハードルを下げる」というのが非常に印象的だった。
- ・障害者に対する社会の状況について、未だに残る課題にも言及して、ある意味障害者目線で共生社会への提言がされているというところがすごく印象的だった。
- ・視覚障害というものの中にもいろんなバリエーションがあるのだということも、すごく大事な主張だった。
- ・亡くなった恩師の方の話とか、パラでメダルが取れなかったとか、なかなか脚本のあるドラマでは描けないようなノンフィクションならではのドラマが、非常に太一さんの生き様を映していて、我々視聴者の純粋な感動を呼んだ。
- ・ダイバーシティの考え方を受け入れて尊重をして生かすことが、共生社会への提言として非常にうまく描かれているすごくいいドキュメンタリー番組だった。
- ・障害者と健常者をつなぐということをよくアピールと言うか、投げかけている番組だと思った。

- ・明るさがあることは大事。それがこの光というところも当てはまり、題名もすごく良かった。大変素晴らしい番組だった。
- ・どんな人にとっても生活しやすい社会をどうやって作っていくかこそが我々の大きな課題であって、そのきっかけとしてこの番組は存在している。
- ・ナレーターの毛織アナウンサー、実に綺麗ないい声で、我々の中に染み通った。
- ・タイトル、音響、ディレクターさん、さすが10年かけていい番組作ってくれた全体としてとても良い番組。その中でもアナウンサーの声とアナウンサーに喋らせるディレクターのこの文章の力が非常にいい。
- ・社会の不条理と共生社会をどうつなげるかというのは、太一さんの問題ではなくて、私たち1人1人に突きつけられた問題で、その突きつけられた問題に対して私たちがどういう選択をし、どう思うかを考えていかなければいけないという意味で非常に出来のいい番組だ。
- ・これだけ取材を重ねてきたということが本当に最大に素晴らしいことで、できればこれからも続けてほしい。
- ・この少年を追い続けることによって全体の理解のレベル、特に全盲の方の周りのレベルが上がってくると思うし、派生して全ての障害者に対する理解と愛情といったものが醸成されていくのではないかと思う。
- ・盲学校ではなくて普通高校に行くという決断した本人の葛藤や、学校の先生がその時どういう風に言ったのか、勉強どうやってやったのかなどにすごい興味が湧く。
- ・県立高校の中でどれだけ視覚障害やいろんな障害のあるお子さんを受け入れているのかと、普通高校にチャレンジすることがどれだけハードルが高いのかということ解説してほしい。
- ・点字ブロックとか、支援担当の先生を置くなど、美須ヶ丘高校の取り組みというのも、これから社会として評価してやらなければいけないのではないかと。

- ・ブラインドサッカーについて知らない視聴者も多かったと思うので、ブラインドサッカーに対する解説がもう少しあると、もうちょっと興味が湧いた。
- ・太一さんの行動がきっかけで、同じ高校の生徒がボランティアに目覚めたのであれば、非常に共生社会への大きな変化の事例としてももう少し掘り下げてみても良かった。
- ・パリから帰ってきた時に本人に喋らせて欲しかった。世界の壁にぶつかって何を感じたのかっていうことをちょっと聞きたかった。
- ・もうちょっと焦点がはっきりすると良かった。

(2) 視聴者対応報告（令和7年6月分）

資料に基づき、令和7年6月分の視聴者対応について、編成部より報告を行った。

(3) その他

配布資料

- ・第560回番組審議会（令和7年6月）議事録
- ・視聴者対応報告資料（令和7年6月分）
- ・モニターレポート

『 NBSフォーカス∞信州

太一の光 ～全盲ストライカーの見つめる世界～ 』

（令和7年5月30日（金）午後7時00分～午後7時57分 放送）

- ・BPO報告（NO. 278）
- ・民間放送ニューズレター（第2240号）
- ・タイムテーブル（7月～9月分）
- ・番組審議会委員名簿

以 上